

- (2) 「寅年は悪作だ」
- (3) 「旧七月一日から七日までに「甲子」があると、その年は凶作だ
- (4) 旧正十六日の風は、どっちから吹く風でも、その年一年はその方向の風がしばしば吹く。
- (5) 大風は、三十年及至六〇年周期をもって来襲を繰返す、といわれている。

◎「巳年は凶作が多い」といわれているが、ほんとうか。

昔から、十二年ごとに巡りくる巳年が恐れられていた。ほんとうに、巳年は凶作であったのだろうか。

一五六四年（永祿七年） 甲子より始まり、一九九三年（平成五年）癸酉までの四百三十年間に巳年は、三十六回ある。このうち巳年で凶作となった年は十八回あり、半分は凶作となっている。又、巳年の前後、一年及び二年の間には、前年では二十四回（六七％）、後年では二十二回（六一％）が凶作となっている。このことから、全く根拠のない諺とはいきれない。（別表1）

◎「寅年は、悪作だ」はほんとうか。

一五六四年から一九九三年まで寅年は三十六回あった。その作柄を調べてみると、不作の年が十三回、平年作の年が二十三回であった。又、寅年の前の年が不作なのは十九回、翌年（後年）は二十一回の凶

また立秋より遅く飛ぶ年は秋の天候がよく、翌年の稲の稔りもよい。

一、井戸の水が冷えるときは秋の天候がよく、温かく感じるとはき秋涼が早くやってくる。夏山も秋山も見ようがあるものだが、草や木にも見ようがある。

一、大根の作がよければ翌年の稲は稔りがよい。大根が一般に不作だと翌年の稲は上作ではない。

一、梨やスモモなどに狂い花が咲くときは、秋の天候がよい。

一、秋陽というのは、七、八月残暑がきびしく雷の発生が多く電光が走ることがあり、八、九月までも温暖な天気がつづくことである。このような秋陽のあった翌年は、稲作はよいものである。

一、十月のころ、阿王鳥が多く飛んでくるときは、翌年の稲は上作でない。

一、「根雪になるのは冬至の七、八日前」とは昔からの言い伝えである。冬至前から冬至にかけて、寒気がきびしく雪が堅く、歩くと雪がきしきしと鳴って降り積もるようならば、翌年の稲は上作である。

一、七月過ぎて、季節風の西風が吹かないのは秋陽のある徴候である。西風を秋風という。

一、寒中（新暦一月五日〜二月三日ごろ）に春を催す」といって、このころ一時的に暖気になることがある。寒に入って三日目の雨を「寒三の雨」といい、九日目の雨を「寒九の雨」という。「寒中に雨が降らなければ、翌年夏の灌漑用水が不足する」と昔から言い伝えられている。このほか寒中に川の表面にできた氷の張り具合などによる判断など所によってそれぞれいろいろの伝承があるが略す。

一、寒三十日間の天候の推移や変化を時刻的に記録し、これを一年間三

作である。

多少の誤差はあるにせよ、寅年の悪作はあたっていないようだ。

◎凶作は十二年周期が多い。

十干とは、(1)甲、(2)乙、(3)丙、(4)丁、(5)戊、(6)己、(7)庚、(8)辛、(9)壬、(10)癸であり、十二干は、(1)子、(2)丑、(3)寅、(4)卯、(5)辰、(6)巳、(7)午、(8)未、(9)申、(10)酉、(11)戌、(12)亥であり十二月を示している。

この両者を奇数は奇数と、偶数は偶数を順々に組み合わせ、(1)甲子、(2)乙丑、(3)丙寅、(4)丁卯、(5)戊辰、(6)乙巳、(7)庚午、(8)辛未、(9)壬申、(10)癸酉、(11)甲戌、(12)乙亥というような順序に並べたものを六十干支といわれます。東洋では三千年末、この六十周期をもって記年法、記日法が行われている。

自然現象は周期的に必ずやってくる。

そこで、四百三十年前に逆のぼって「干支」による豊凶作を探ってみると、凶作は十三年毎に多く発生している。

一五六四年から一九九三年までの間、十三周期は三十四回を数えるが、そのうち凶作となった年は十九回、その前の年では、二十回、翌年では二十一回の凶作に見舞われている。平成五年の次は平成十八年二〇〇六年が丙戌で、十三年周期となる。（別表2）

（耕作断り）

一、立秋（新暦八月八日ごろ）の二日あるいは三日目にカゲロウが飛ぶが、六、七日ずつ間をおいて三度飛ぶことがある。立秋の節より早く飛ぶ年は概して秋の天候が冷涼で翌年の稲作も思わしくない。

百六十五日に配分してみて、翌年の風雨、晴曇、温涼、暖冷などを考えればまず違うことがない。自分は寒中に昼夜の風雨や晴曇の推移を翌年の実際の天候の経過に当てはめてみた。こまかな時刻までははっきりしないが、大体は当たっていた。

一、元旦の風を「一年中の親風」という。元旦の北風は、よい兆しではない。

一、節分の夜大豆を焼いて年中の晴曇を考えてみる。

一、立春のころに濃い霞が発生するのは稲作によい、また野原に狐館が生えているのは豊作の兆しである。

一、屋根の帰りや漏りなどで陽気のすすみ具合を知ることができる。また雪どけが強いしである。

一、雪消えの見方によっても来年の作柄を予想することができる。

○ 雪の消えばなれがよいのは豊、悪いのは凶。

○ 雪消え次第に見えてくる土の乾きが強いばあいは豊、また湿りがあるのは凶。土の乾きが強い年は道路が堅くて鋤石のようであり、湿りをもつ年は夏街道のようである。

○ 雪消えのとき、土と雪との間が透くのは豊、雪へ土が付着するのは凶、雪消えに土が乾いて土煙りが立つのはよい。雪消えの見方はいろいろあるが、これを略す。

(別表2)

13年周期にみる豊凶作況

1564～1993年

	西曆	和曆	豊凶別	前年		後年	
甲子	1564	永禄7	不明	不明	不明	1565・1566	大凶作2年続
丁丑	1577	天正5	不明	不明		1578	普通作
庚寅	1590	天正18	不作	1589	不作	1591	普通作
癸卯	1603	慶長8	減収	1601・1602	2年不作続	1604	大凶作
丙辰	1616	元和2	大凶作	1613・1615	不作、大凶作	1617・1619	凶作、大凶、凶作
乙巳	1629	寛永6	不作	1624・1628	5年不作続	1630	減収
壬午	1642	寛永19	凶作	1639・1641	3年凶作続	1644	皆無
乙未	1655	明暦2	普通	1654	普通	1656	楽作
戊申	1668	寛文8	楽作	1669	楽作	1669	楽作
辛酉	1681	天和1	大凶作	1673・1680	8年間凶作続	1684・1687	洪水不作
甲戌	1694	元禄7	大凶作	1962・1693	2年大凶作	1695	皆無
丁亥	1707	宝永4	皆無	1705・1706	2年凶作		楽作
庚子	1720	享保5	凶作	1717・1719	3年凶作	1723・1725	南部凶作
癸丑	1733	享保18	南部凶作	1732	楽作	1736・1737	凶作、大凶作
丙寅	1746	延享3	凶作	1745	普通	1747・1751	凶作5年続
乙卯	1759	室暦9	普通	1755・1756	2年凶作	1762・1763	凶作2年続
壬辰	1772	安永1	普通	1771	不作	1773・1774	凶作2年続
乙巳	1785	天明5	半作	1778・1784	7年大凶作続	1786	凶作
戊午	1798	寛政10	普通	1796	皆無	1800・1999	旱魃不作2年
辛未	1811	文化8	普通	1810	普通作	1812	普通作
甲申	1824	文政7	楽作	1823	楽作	1825	水害不作
丁酉	1837	元文2	大凶作	1835・1836	2年不作凶作	1740・1742	不作
庚戌	1850	嘉永3	楽作	1849	楽作	1851	楽作
癸亥	1863	文久3	楽作	1862	楽作	1864	楽作
丙子	1876	明治9	普通	1873	減収	1878	減収
乙丑	1889	明治22	不作	1888	普通作	1890・1891	不作
壬寅	1902	明治35	大凶作	1901	普通作	1903・1906	凶作4年続
乙卯	1915	大正4	普通	1913	大凶作	1916	楽作
戊辰	1928	昭和3	普通	1927	楽作	1931・935	凶作5年続
辛巳	1941	昭和16	凶作	1939	凶作	1942	普通
甲午	1954	昭和29	凶作	1953	凶作	1955	普通
丁未	1967	昭和42	普通	1965・966	2年凶作	1968	普通
庚申	1980	昭和55	大凶作	1976・977	凶作	1981	普通
癸酉	1993	平成5	大凶作		普通作	?	?
丙戌	2006	平成18					

(別表1)

巳年の作柄状況

巳年西曆	巳年年号	作柄	前年	後年
1569年	永禄12年	平年作	前2年おき、2年凶作	2年おき大洪水
1581年	天正9年	〃	不明	不明
1593年	文禄2年	〃	前2年おき、2年凶作	不明
1605年	度長10年	豊作	前年大凶作	豊作
1617年	元和3年	凶作	前2年大凶作	後3年凶作続
1629年	寛永6年	不作	前2年凶作	翌年不作
1641年	〃18年	凶作(大風雨)	前2年凶作	翌年凶作1年おき大凶作
1653年	承応2年	凶作冷害	前年不作	2年おき凶作
1665年	寛文5年	豊作	豊作	豊作
1677年	正宝5年	大凶作	1年おき、前年3年凶作	1年おき3年凶作続
1689年	元禄2年	平年作	1年おき、4年凶作続	翌年不作、1年おき4年凶作続
1701年	元禄14年	凶作風水害	1年おき凶作	後2年凶作
1713年	正徳3年	平年作	前年風雨不作	翌年大凶作
1725年	享保10年	凶作冷害	前々年大風減収	平年作
1737年	元文2年	大凶作冷害	南部年不作	1年おき後2年不作
1749年	寛延2年	大凶作冷害	前2年凶作	翌年より不作2年(大水害)続
1761年	宝暦11年	平年作	前2年水害不作	翌年より2年凶作続
1773年	安永2年	凶作害	前年風水害不作	翌年凶作、1年おき5年続きの大凶作
1785年	天明5年	凶作風水害	前3年続き大凶作	翌年より4年続きの大凶作
1797年	寛政9年	平年作	前2年凶作	翌年不作
1809年	文化6年	平年作	平年作	3年おき凶作2年続
1821年	文政4年	豊作	豊作	3年おき凶作(水害)
1833年	天保4年	大凶作冷害	前年大凶作	翌1年おき、5年間凶作続
1845年	弘化2年	平年作	前年大洪水不作	豊作
1857年	安政4年	〃	平年作	平年作
1869年	明治2年	大凶作冷害	前2年凶作	翌年凶作
1881年	明治14年	平年作	平年作	平年作
1893年	明治26年	平年作	前1年おき、前3年続き大凶作	3年おき凶作
1905年	明治38年	凶作冷害	前年3年続き大凶作	翌年凶作
1917年	大正6年	平年作	凶作	平年作
1929年	昭和4年	平年作	平年作	1年おきの2年凶作
1941年	昭和16年	凶作冷害	前々年凶作	3年おき減収
1953年	昭和28年	凶作冷害	平年作	翌年凶作
1965年	昭和40年	凶作冷害	平年作	翌年不作
1977年	昭和52年	不作	前年凶作	2年おき、2年凶作続
1989年	平成1年	平年作	前年凶作	2年おき、減収

「干支」による年代別作柄調

		西歴	和歴	豊凶別	西歴	和歴	豊凶別	西歴	和歴	豊凶別	西歴	
1	甲子	きのえね	1564	永禄7		1624	寛永1	早害減	1684	貞亨1	凶作	1744
2	乙丑	きのとうし	1565	永禄8	大凶作	1625	寛永2	早害減	1685	貞亨2	不作	1745
3	丙寅	ひのえとら	1566	永禄9	不作	1626	寛永3	早害減	1686	貞亨3	不作	1746
4	丁卯	ひのとう	1567	永禄10		1627	寛永4	不作	1687	貞亨4	洪水	1747
5	戊辰	つちのえたつ	1568	永禄11		1628	寛永5	不作	1688	元禄1		1748
6	巳巳	つちのとみ	1569	永禄12		1629	寛永6	不作	1689	元禄2		1749
7	庚午	かのえうま	1570	元亀1		1630	寛永7	不作	1690	元禄3	不作	1750
8	辛未	かのとひつじ	1571	元亀2	岩木山より光飛ぶ	1631	寛永8	減収	1691	元禄4		1751
9	壬申	みずのえさる	1572	元亀3	洪水	1632	寛永9		1692	元禄5	大凶	1752
10	癸酉	みずのととり	1573	天正1		1633	寛永10		1693	元禄6	凶作	1753
11	甲戌	きのえいぬ	1574	天正2		1634	寛永11		1694	元禄7	大凶	1754
12	乙亥	きのとい	1575	天正3		1635	寛永12		1695	元禄8	大凶	1755
13	丙子	ひのえね	1576	天正4		1636	寛永13		1696	元禄9		1756
14	丁丑	ひのとうし	1577	天正5	6月彗星現れる	1637	寛永14	不作	1697	元禄10		1757
15	戊寅	つちのとら	1578	天正6		1638	寛永15	不作	1698	元禄11		1758
16	乙卯	つちのとう	1579	天正7		1639	寛永16	洪水	1699	元禄12	凶作	1759
17	庚辰	かのえたつ	1580	天正8		1640	寛永17	凶作	1700	元禄13		1760
18	辛巳	かのとみ	1581	天正9		1641	寛永18	凶作	1701	元禄14	凶作	1761
19	壬午	みずのえうま	1582	天正10		1642	寛永19	凶作	1702	元禄15	凶作	1762
20	癸未	みずのとひつじ	1583	天正11		1643	寛永20		1703	元禄16	減収	1763
21	甲申	きのえさる	1584	天正12		1644	天保1	皆無	1704	宝永1	地震	1764
22	乙酉	きのととり	1585	天正13		1645	天保2		1705	宝永2	凶作	1765
23	丙戌	ひのえいぬ	1586	天正14		1646	天保3		1706	宝永3	減収	1766
24	丁亥	ひのとい	1587	天正15		1647	天保4		1707	宝永4	皆無	1767
25	庚子	つちのえね	1588	天正16		1648	慶安1	洪水	1708	宝永5		1768
26	乙丑	つちのとうし	1589	天正17	不作	1649	慶安2	凶作	1709	宝永6		1769
27	庚寅	かのえとら	1590	天正18	不作	1650	慶安3		1710	宝永7	豊作	1770
28	辛卯	かのとう	1591	天正19		1651	慶安4		1711	正徳1	平年作	1771
29	壬辰	みずのえたつ	1592	文禄1		1652	承応1	不作	1712	正徳2	不作	1772
30	癸巳	みずのとみ	1593	文禄2		1653	承応2	凶作	1713	正徳3		1773

和歴	豊凶別	西歴	和歴	豊凶別	西歴	和歴	豊凶別	西歴	和歴	豊凶別	西歴	和歴	豊凶別
延亨1	洪水	1804	文化1		1864	元治1		1924	大正13	凶作	1984	昭和59	
延亨2	不作	1805	文化2	豊作	1865	慶応1		1925	大正14		1985	昭和60	
延亨3		1806	文化3	〃	1866	慶応2	大作	1926	昭和1		1986	昭和61	
延亨4	凶作	1807	文化4	〃	1867	慶応3	凶作	1927	昭和2		1987	昭和62	
寛延1	ネズミ	1808	文化5	〃	1868	明治1	凶作	1928	昭和3		1988	昭和63	凶作
寛延2	大凶	1809	文化6	〃	1869	明治2	大凶	1929	昭和4		1989	平成1	
寛延3	洪水	1810	文化7	〃	1870	明治3	凶作	1930	昭和5		1990	平成2	
宝暦1	洪水	1811	文化8	〃	1871	明治4		1931	昭和6	凶作	1991	平成3	減収
宝暦2		1812	文化9	〃	1872	明治5		1932	昭和7	洪水	1992	平成4	
宝暦3		1813	文化10	凶作	1873	明治6	早害減	1933	昭和8		1993	平成5	大凶作
宝暦4		1814	文化11	凶作	1874	明治7		1934	昭和9	凶作	1994	平成6	
宝暦5	大凶	1815	文化12		1875	明治8		1935	昭和10	洪水	1995	平成7	
宝暦6	凶作	1816	文化13		1876	明治9		1936	昭和11		1996	平成8	
宝暦7	凶作	1817	文化14	凶作	1877	明治10		1937	昭和12		1997	平成9	
宝暦8	凶作	1818	文政1	10	1878	明治11	洪水減	1938	昭和13		1998	平成10	
宝暦9	洪水	1819	文政2	年	1879	明治12		1939	昭和14	凶作	1999	平成11	
宝暦10	不作	1820	文政3	間	1880	明治13		1940	昭和15		2000	平成12	
宝暦11	平年作	1821	文政4	楽	1881	明治14		1941	昭和16	凶作	2001	平成13	
宝暦12	凶作	1822	文政5	作	1882	明治15		1942	昭和17		2002	平成14	
宝暦13	凶作	1823	文政6		1883	明治16		1943	昭和18		2003	平成15	
明和1	豊作	1824	文政7		1884	明治17		1944	昭和19		2004	平成16	
明和2		1825	文政8	凶作(水)	1885	明治18		1945	昭和20	減収	2005	平成17	
明和3	地震	1826	文政9		1886	明治19		1946	昭和21		2006	平成18	
明和4	大凶	1827	文政10		1887	明治20		1947	昭和22	減収			
明和5		1828	文政11	大風	1888	明治21		1948	昭和23				
明和6	豊作	1829	文政12		1889	明治22	凶作	1949	昭和24				
明和7	豊作	1830	天保1		1890	明治23	不作	1950	昭和25				
明和8	豊作	1831	天保2		1891	明治24	凶作	1951	昭和26				
安永1	洪水	1832	天保3	大凶7分	1892	明治25		1952	昭和27				
安永2	凶作	1833	天保4	大凶	1893	明治26		1953	昭和28	凶作			

		西 歴	和 歴	豊凶別	西 歴	和 歴	豊凶別	西 歴	和 歴	豊凶別
31	甲午 きのえうま	1594	文禄3		1654	承応3		1714	正徳4	大 凶
32	乙未 きのとひつじ	1595	文禄4		1655	明暦1		1715	正徳5	豊 作
33	丙申 ひのえさる	1596	慶長1		1656	明暦2	凶 作	1716	享保1	凶 作
34	丁酉 ひのととり	1597	慶長2		1657	明暦3		1717	享保2	豊 作
35	戊戌 つちのえいぬ	1598	慶長3		1658	万治1		1718	享保3	凶 作
36	乙亥 つちのとい	1599	慶長4		1659	万治2		1719	享保4	凶 作
37	庚子 かのえね	1600	慶長5		1660	万治3		1720	享保5	凶 作
38	辛丑 かのとうし	1601	慶長6	不 作	1661	寛文1		721	享保6	豊 作
39	壬寅 みずのえとら	1602	慶長7	干害減	1662	寛文2	14	1722	享保7	
40	癸卯 みずのとう	1603	慶長8		1663	寛文3	年	1723	享保8	減 収
41	申辰 きのえたつ	1604	慶長9	大 凶	1664	寛文4	間	1724	享保9	
42	乙巳 きのとみ	1605	慶長10	楽 作	1665	寛文5	楽	1725	享保10	凶 作
43	丙午 ひのえうま	1606	慶長11	楽 作	1666	寛文6	作	1726	享保11	
44	丁未 ひのとひつじ	1607	慶長12	楽 作	1667	寛文7		1727	享保12	
45	戊申 つちのえさる	1608	慶長13	楽 作	1668	寛文8		1728	享保13	洪 水
46	乙酉 つちのととり	1609	慶長14	楽 作	1669	寛文9		1729	享保14	
47	庚戌 かのえいぬ	1610	慶長15	楽 作	1670	寛文10		1730	享保15	8
48	辛亥 かのとい	1611	慶長16	楽 作	1671	寛文11	凶 作	1731	享保16	年
49	壬子 みずのえね	1612	慶長17	楽 作	1672	寛文12		1732	享保17	間
50	癸丑 みずのとうし	1613	慶長18	不 作	1673	延宝1	不 作	1733	享保18	豊
51	申寅 きのえとら	1614	慶長19	楽 作	1674	延宝2	不 作	1734	享保19	作
52	乙卯 きのとう	1615	元和1	大凶皆無害	1675	延宝3	不 作	1735	享保20	
53	丙辰 ひのえたつ	1616	元和2	大凶冷害	1676	延宝4	洪 水	1736	元文1	南不作
54	丁巳 ひのとみ	1617	元和3	凶 作	1677	延宝5	皆 無	1737	元文2	大 凶
55	戊午 つちのえうま	1618	元和4	凶 作	1678	延宝6	早害減	1738	元文3	減 収
56	乙未 つちのとひつじ	1619	元和5	凶 作	1679	延宝7	不 作	1739	元文4	不 作
57	庚申 かのえさる	1620	元和6	凶 作	1680	延宝8	凶 作	1740	元文5	凶 作
58	辛酉 かのえとり	1621	元和7		1681	天和1	天 凶	1741	寛保1	洪 水
59	壬戌 みずのえいぬ	1622	元和8		1682	天和2		1742	寛保2	洪 水
60	癸亥 みずのとい	1623	元和9		1683	天和3	不 作	1743	寛保3	

豊凶区分、大凶作は皆無作より3分作、凶作は3分作、7分作、不作は7分作～8分作、後は減

西 歴	和 歴	豊凶別	西 歴	和 歴	豊凶別	西 歴	和 歴	豊凶別	西 歴	和 歴	豊凶別
1774	安永3	凶 作	1834	天保5		1894	明治27		1954	昭和29	凶 作
1775	安永4		1835	天保6	凶 作	1895	明治28		1955	昭和30	
1776	安永5	凶 作	1836	天保7	凶作4分	1896	明治29		1956	昭和31	
1777	安永6	凶 作	1837	天保8	凶作3分	1897	明治30	凶 作	1957	昭和32	
1778	安永7	凶 作	1838	天保9	凶作4分	1898	明治31		1958	昭和33	
1779	安永8	凶 作	1839	天保10	凶作3分	1899	明治32		1959	昭和34	
1780	安永9	洪 水	1840	天保11		1900	明治33		1960	昭和35	
1781	天明1		1841	天保12	洪 水	1901	明治34		1961	昭和36	
1782	天明2	大 凶	1842	天保13		1902	明治35	大 凶	1962	昭和37	
1783	天明3	大 凶	1843	天保14		1903	明治36	凶 作	1963	昭和38	
1784	天明4	大 凶	1844	弘化1	洪 水	1904	明治37	大 凶	1964	昭和39	
1785	天明5	半 作	1845	弘化2		1905	明治38	凶 作	1965	昭和40	不 作
1786	天明6	大 凶	1846	弘化3		1906	明治39	凶 作	1966	昭和41	不 作
1787	天明7	不作凶8分	1847	弘化4		1907	明治40		1967	昭和42	
1788	天明8	不作凶6分	1848	嘉永1		1908	明治41		1968	昭和43	
1789	寛政1	凶作7分	1849	嘉永2		1909	明治42		1969	昭和44	
1790	寛政2		1850	嘉永3		1910	明治43		1970	昭和45	
1791	寛政3		1851	嘉永4		1911	明治44		1971	昭和46	
1792	寛政4	凶 作	1852	嘉永5		1912	大正1		1972	昭和47	
1793	寛政5	凶 作	1853	嘉永6		1913	大正2	大 凶	1973	昭和48	
1794	寛政6		1854	安政1		1914	大正3		1974	昭和49	
1795	寛政7	洪 水	1855	安政2		1915	大正4		1975	昭和50	
1796	寛政8	皆 無	1856	安政3		1916	大正5	4分作	1976	昭和51	凶 作
1797	寛政9	平年作	1857	安政4		1917	大正6		1977	昭和52	不 作
1798	寛政10	不作(洪水)	1858	安政5		1918	大正7		1978	昭和53	
1799	寛政11	豊 作	1859	安政6		1919	大正8		1979	昭和54	
1800	寛政12	不 作	1860	万延1		1920	大正9		1980	昭和55	大凶作
1801	享和1	豊 作	1861	文久1		1921	大正10	凶 作	1981	昭和56	凶 作
1802	享和2	豊 作	1862	文久2		1922	大正11	5分作	1982	昭和57	
1803	享和3	豊 作	1863	文久3		1923	大正12		1983	昭和58	

収作（網目は巳年を示す）



大地主と 大作人と小作人

秋元 惣之進

或る日 明治生れの八八才になる往時の大作人だった（大地主と小作人の仲介役）古老から往時の大地主や大作人からの年貢米の厳しい収奪をし、小作人を生活のどん底に落とし入れ、地主制度の権力と重庄の下に踏みじられ、無知で貧困な小作人は何時も受身で長い間の搾取と重庄に百姓だから仕方が無いと諦め食われなくなると北海道、カムチャツカに身売り、又、娘を売ったと言う話を聞いた。

明治、大正の身売りが雄弁に物語っていると聞き、往時からの百姓の農作業や其の他の姿について大作人だった古老はポツリポツリと静かに語ってくれた。

明治から大正末期迄は百姓は貧困により着衣が粗衣だった。秋が近くなると虫の鳴き声が「ポド刺せ」ポド刺せと（アテツギ）鳴き、農家の女達は毎晩、遅く迄、ランプの明りやシポド（囲炉裏）の焚火の明りで「ポド」を円念に刺したと言う。

藩政時代は農民には木綿を用える事が固く禁じられたと言うが当時は木綿や綿は上から（関東方面）移入し非常に高価だったと言う。明治末

期になっても百姓には決して木綿や綿は高価で買う事が出来なかった。古老の話だと明治末期には木綿の浴衣が玄米一俵の値段だったと言う（当時の単収は大豊作で五、六俵だった）

当時、盛んに売れたのが古着の比較的良い部分だけを切り取った雑多な小布が混じった洗濯もされていない雑布同様の布を上から（関東方面）取り寄せ古着屋で一束、幾等で売っていた。

木綿の小布を農家の人達が買ひあさり「ポド」を刺したが古着屋では名前の通り、ポロ儲けしたと言う。当時の貧しい農家の人々は木綿に憧れても手が出なかったから古着を買ひ「ポド」を刺し、普段着や仕事着にしたと言うが、嘉瀬でも昭和に入り古着屋が二軒あり大繁盛した。

木綿が津軽にも僅小づゝ入ってきた頃には男の仕事着は上半身に筒袖の「フツチャギ」を着て木綿の薄い股引を穿くのが普通となった。女の仕事着は上半身には「ポド」を着て下半身には股引を穿き、普段着も同様だった。

又、女達は今も風呂敷を被るが当時は年齢に依り色が異り、中年以上だ

と白か黒、嫁になると黄色か白、メラシ（娘）は桃色と分けたが、夏は大抵白一色だった。

又、嘉瀬は冬期は積雪寒冷地なので冬の藁仕事は「ニラ（作業場）」の火の気の無い、寒い一隅で農作業に欠く事の出来ない藁細工の作業があり、冬期間に必ず終らないといけない仕事で有り、冷えびいとした「ニラ（作業場）」の一隅で一冬過ごしから身体の保温を維持する為、胴毛皮を防寒衣として着衣した。

金持だと犬の胴毛皮を着たが犬の毛皮が一番暖かったと言う。ニラ（作業場）の藁仕事について藁織りがある。今から約三六〇年前、つがる開拓の為に移住した若狭国（福井県）の女達が藁織りを教え広げたと有り。

当時は自給自足の為だったが今の様に畳が使われる前は資産家でも家の中の敷物は藁であった。当時は手ハタゴで（手で藁を織った）朝、暗い内から一生懸命頑張っても二枚位より織れなかった。昭和七、八年頃、嘉瀬にも足踏み式の機械が入り手ハタゴより五倍から十倍も能率が上がったが其の後、全自動製藁機が開発導入され企業化した。

農閑期には一年中使う藁仕事にも一日の定量があった。（一尋は左右の両腕を延ばして約一米四〇〜五〇センチ）

- 使え縄、五〇尋一把として
- ノマ編、拾三尋縄で
- 米俵
- 八斗入れ俵俵
- 馬杓
- 井戸水を汲み上げるツルベ縄

- 十 把
- 七 枚
- 十二 俵
- 十 俵
- 二五 足
- 四 本

細縄（俵編に使う）

男 五百尋
女 三百尋

田騷馬杓

七 足

馬鞍に使うモトツレ

六、七尋

草鞋

十五 足

足タカ

二〇 足

稲の島立を結ぶ「ツナゲ」

平均 千 本

推肥丸き

男 三五〇丸
女 一五〇丸

又、昔の百姓は手と足で田畑を耕したが、馬耕で無かった時代は田圃を三本鋤で一畝、一畝、耕起したが大体、左の通りと聞いた

田の荒起 一番打で一人役（約二〇〇坪）

二番打 二人役（約四〇〇坪）

三番打 三人役（約六〇〇坪）

田騷き 一番荒騷き（二人 役）

二番 騷き（四人 役）

メグロ（畦切）大正末期は一反の枚数が四、五枚が普通だったと言う。

（一町歩）

水畦（二町歩）

田植は女で（二人役 約一反一畝）

苗取 女二人に一人（約 六〇〇把）

稲刈は朝飯前に米、二斗位、搗いてから稲刈に行き（往時は白で白米を搗いた（一人二百坪）

今、考えると想像もつかない重労働だった。